吉祥寺と井の頭公園から生まれたフリーペーパー

PARKS パークス

ご自由にお持ち帰りください。

最終号です。
vol,5

キャストインタビュー
橋本愛・永野芽郁・染谷将太

じかん／ばしょ／ひと
やくしまるえつこ・インタビュー

吉祥寺だけが住みたい街でした
マキヒロチ

『PARKS パークス』ファッションの舞台裏
——高山エリ

IN CINEMA, IN KICHIJOJI
——松田広子

●井の頭恩賜公園100年実行委員会100年事業企画

いよいよ
公開です!!!

吉祥寺と井の頭公園から生まれた映画

PARKS パークス

『PARKS パークス』は、ここから始まります。

2014年の秋の終わり、「井の頭公園の映画を作りたい」という、企画者の本田さんの電話から始まった映画『PARKS パークス』。あっという間の2年半でした。でも映画はここからが始まりとも言えます。多くの方たちに観ていただいて初めて映画は映画となる。全国を回ります。井の頭公園のことを知らない人も、かつて井の頭公園を訪れたことのある人も、誰もがいろんな思いを抱き、この映画を観ていただけたらと思っています。その思いが映画を作り公園を作る。そしてそのとき誰もが自分の人生を最大限に輝かせる。そんな開かれた映画として『PARKS パークス』はあるはずです。

そしてこのフリーペーパーも今号が最終号。もちろんそれが終わりだとは思っていません。『PARKS パークス』には終わりも始まりもなく、常に更新され重ね合わされ、広がり続ける。いろんなヴァージョンが生まれ、それがまた『PARKS パークス』に重なっていく。このフリーペーパーのさまざまなヴァージョンが全国で作られ始めるその日を夢見ています。

Story 父や祖母が60年代に残した1本のオープンリールテープ。そこに収録された未完成の音楽が、若者たちの手によって半世紀後に蘇る。それはかつてあった音楽でもあり今ここにある音楽でもあり、来るべき未来の音楽でもある。吉祥寺と井の頭公園を舞台に、あらゆる時代に鳴り響く音楽を、現在の若者たちとかつての若者たちが作り上げる、音楽青春映画。

橋本愛　永野芽郁　染谷将太　石橋静河　森岡龍　／　佐野史郎　　瀬田なつき監督作品　音楽監修 トクマルシューゴ
劇中歌:PARK MUSIC ALLSTARS「PARK MUSIC」　エンディングテーマ:相対性理論「弁天様はスピリチュア」

製作:本田プロモーション BAUS　製作プロダクション:オフィス・シロウズ　配給:boid　宣伝:VALERIA、マーメイドフィルム

4/22(土)よりテアトル新宿、4/29(土)より吉祥寺オデヲン ほか全国順次公開

切実な軽やかさにあふれた映画です。 橋本愛

――主人公の純はどんな女の子ですか？

ふだんは自分の役を「こういうキャラクターなんだ」ときちんと管理できてないと不安なんですが、今回は、それが現場でどんどん崩されていく感じがありました。監督の演出がとても感覚的で、「軽く」「テンポよく」といった言葉を手がかりに演じました。純は、客観的に見るとすごく情けなくて不器用な女の子で、滑稽な部分もあるし、なるべく拙く見えないよう、なんとかこの子をお客さんに愛おしいと思ってもらいたい、とずっと考えていました。だから、完成した映画を見るときは不安でしょうがなかったんです。純ちゃん、どこに行っちゃったかな、とドキドキして。実は見終わったあとも浮遊感が続いていて、まだ純という人をしっかり掴みきれていない思いがあります。でも見てくれたみなさんが「すごくよかった」と本音で言ってくれたので、そこはよかったのかな、と。それから、あのとき「軽く」って監督が言っていたのはこういうことなんだな、と、出来上がった映画を見て改めていろいろ気がつきました。

――純がギターを弾き語りする場面も印象的です。

ギターは、2年前くらいにプライベートで始めたんです。ずっと超自己流で、でたらめに弾いて歌っていたんですが、1年くらいブランクがあって今回久しぶりに触ったら、指が硬くなっていました。音楽に関しては、参加ミュージシャンの名前を聞いたときから、なんてセンスがいいんだと驚いてました。穏やかな気持ちになれて、切ないけど沈み過ぎない音楽が好きなんですが、その層のいい曲がそろっていますよね。ちょっとひねくれた、いびつな部分も根底にあって。悲しい印象の曲を悲しいシーンにのせて煽ったり、という音楽の使い方はしてない。瀬田監督の言う、「切実だけど軽やかな」気持ちに寄り添う音楽で満たされた作品だと思います。

interview

美しい映像と音楽に圧倒されます。

永野芽郁

――撮影現場はどんな雰囲気でしたか？

最初は、静かな撮影になるのかな？　と思っていたんですけど、瀬田監督の穏やかで面白くて、なごめるキャラクターも手伝って、いつもどこかで笑いが起きているような楽しい現場でした。橋本愛さんが一回、モノマネをしてくれたんですけど、そんなことをされるイメージがなかったこともあって、大笑いして涙が止まらなくなっちゃって（笑）。

――永野さんが演じたハルは、お父さんの元カノを探すために、リュックを背負ってふらりと吉祥寺にやってくる、どこかミステリアスな雰囲気の女の子ですね。

ハルは、ちょっとつかみどころがなくて、テンションが急に上がったり下がったりする難しい役でしたが、監督と話し合って、自分なりにイメージをつかんでいきました。あとは、橋本さんと染谷さんに引っ張ってもらって、後ろからついていきました。おふたりとも、とにかくアドリブがすごくて。私はこれまであまり自分から積極的にアドリブで演じるタイプではなかったので、たくさん勉強させていただいたような気がします。

――完成した映画を見ての感想は？

映像と音楽が圧倒的にきれいで、集中して見入ってしまいました。私が演じたハルについても「ああ、そういうことだったのか！」といろんなことがつながる感じがしましたね。

――吉祥寺は以前からなじみがある街だそうですね。

普段からよく買い物にもくるし、昔から友達と公園に遊びに来てボートに乗ったりしていたので、撮影している間、少し不思議な感じでもありました。私はサンロードの靴屋さんの前でスカウトされて、それが芸能界に入るきっかけになったので、吉祥寺は私の人生を変えた街なんです。

interview

後半の加速感は想像を超えていました。 染谷将太

――染谷さんは瀬田監督の作品にはこれまで何回も出演なさっていますが、今回の現場はいかがでしたか？

瀬田監督の映画は、時間と空間を独特の視線で切り取っていく。それがとても切なくて、哀愁を感じるんです。映像の温度がじんわりと身体に染みわたって感動する。そんな素敵な空気があふれる映画を作る方です。今回はこれまでになく何回もテイクを重ねましたが、あとはいつも通り、監督の人柄に引き付けられ、皆からアイデアが湧き出てくる現場でした。

――トキオという役について教えてください。

トキオはムードメーカーでありつつフラットな奴で、でも同時にピュアで自然に人を導く。魅力的な役でした。

――完成した映画を見て新しい発見はありましたか？

瀬田監督が積み上げ、ブラッシュアップしてきた映画観が手に取るようによくわかって、とても嬉しく、心踊りました。本当に素敵な時間が流れている映画でした。後半につれてどんどん加速していく感覚は想像を超えていました。ライブでのぶっ飛び具合や、展開の妙。深くまで引きずり込まれていくような、引き上げられていくような感覚で、とても興奮しました。物語というのは、常に生まれ続け、生まれ変わり続けているのだと感じました。

――染谷さんのラップも見どころのひとつですね。

ラップは、園子温監督の『TOKYO TRIBE』でやったほか、知人のヒップホップグループのアルバムに1曲だけ参加させてもらったりしていました。ラストのミュージカルシーンのラップ部分はceroの髙城さんにお願いしましたが、その他のフリースタイルシーンは瀬田さんとトクマルシューゴさんと一緒に作らせてもらいました。

じかん
ばしょ
ひと
No.05

バウスが無くなったあとに巡り逢う ちょっとしたタイムマシーン

やくしまるえつこインタビュー

本コーナーの最終回は、『PARKS パークス』のエンディングテーマ「弁天様はスピリチュア」を歌っている「相対性理論」のやくしまるえつこさん。まるでこの映画の為に作られたかのような楽曲ですが、実はこの曲が作られたのは、映画の話がくる前のこと。吉祥寺バウスシアターが閉館して、取り壊される前に行ったセッションから生まれた曲でした。同じ吉祥寺という場所から生まれた音楽が、まるで兄弟のような映画『PARKS パークス』に再び出会う。そんな不思議な経緯を語って頂きました。

取材・構成／杉原環樹

2014年6月　解体直前のバウスシアターで密かに行われた相対性理論のセッション

――『PARKS パークス』のエンディングテーマ「弁天様はスピリチュア」は、2014年に閉館した映画館・吉祥寺バウスシアターとの関わりから生まれた曲だそうですね。

やくしまる：はじめてバウスで演奏したのは、2012年、「爆音3D映画祭」のプログラムのひとつとして、ジョルジュ・メリエス監督のサイレント映画『月世界旅行』をスクリーンに流しながら、ライブを行ったときのことです。映画館って、音を体験する環境として独特の気持ち良さがあるんです。スタジオともライブ会場とも違う音響空間なので、いずれどこかの映画館で演奏してみたいと思っていました。普段から相対性理論のライブでは、やくしまると他のメンバーと

会場のお客さんそれぞれが、全員同じ空間にいながらパーソナルなスペースの中にいることが多いのですが、そのあり方も、映画館の体験に近いなと思っていました。そういえば、2013年に国際フォーラムでのマイ・ブラッディ・ヴァレンタインとのライブを見てくれた樋口泰人さん(『PARKS パークス』プロデューサー)も、相対性理論のライブを「映画的だ」と表現してくれていましたね。

――実際に演奏されてみて、いかがでしたか?

やくしまる:まるで違和感がなかったです。サイレント映画に音を付けるというと、普通は伴奏のイメージがありますが、相対性理論がやるのであれば普通に伴奏を付けても面白くない。ちょうど「ムーンライト銀河」という楽曲が、『月世界旅行』のイメージと合っていたので、ライブでは朗読と即興演奏も交えつつ、この曲を軸にした伴奏とも通常のライブとも違う演奏を行いました。映画を意識した演奏をするもしないも各プレイヤーの自由なのですが、そこには確実に映画が存在している。1902年の映画と2010年のポップスが時空を超えて共存する空間。プレイヤーがそこに流れている映像から演奏への意識を共有するというあり方が面白かったです。

――その後、相対性理論は閉館後のバウスでもセッションを行いました。

2014年6月　解体直前のバウスシアターで密かに行われた相対性理論のセッション

やくしまる:この『月世界旅行』のライブの体験が面白かったので、バウスが閉館したあと、建物の解体が始まる直前に劇場へ入って、機材も入れて、二日間のセッションをやらせてもらいました。このときは、フィリップ・ガレルの『現像液』という初期のサイレント映画を流しながら、1日目は即興が中心で、2日目は基となる曲を持ち込んで展開していきました。映像を流しながら演奏するというのは、普通にスタジオで音を鳴らす時には決して存在し

2014年6月　解体直前のバウスシアターで密かに行われた相対性理論のセッション

ない異物を感じながら演奏するということ。敢えてそういう環境に身を置くことで、意識がぼうっとしていい意味で散漫になり、それがむしろ演奏を自由にしてくれる。

――それをやらせてくれる映画館も、なかなか珍しいですよね。

やくしまる：そうですね。バウスは、音の鳴る空間としてもとてもいい場所だった。おかしくて、素敵な映画館だったと思います。セッションには、馴染みのある「GOK SOUND」さんが機材を持ってきてくれたんです。吉祥寺周辺には、ほかにも、遊びのわかる大人のミュージシャンがたくさん住んでいたりして、すごく贅沢な秘密基地みたい。無くなると聞いたときは、とても残念でした。

――このセッションは、「弁天様はスピリチュア」を作るために行ったんですか？

やくしまる：この時点ではまだ、『PARKS パークス』という映画の話はありませんでした。お気に入りの映画館がなくなってしまうという時空間の中で、ただ録っておきたいと思ったんです。「弁天様はスピリチュア」のアイデアが出てきたのは、セッションの合間に、井の頭公園をブラブラしていたとき。公園にいる人々や池のほとりにある井の頭弁財天を見て、「スピリチュアだなあ」と思って。井の頭公園に来ている人たちって、すこし魂がふわふわしているような、独特の雰囲気がありません？

――経済活動から外れるために来ているような空気がありますね。

やくしまる：天と地の間の場所で、瞑想や修行をしているような雰囲気。弁天様の存在がそうさせているのかは分からないけれど、池があって、人工のスワンが浮いていて、木々が生い茂っていて、楽園のようですよね。そうした印象と、取り壊しの決まったバウスでのセッションを通して曲の原型が生まれたのですが、その後、「吉祥寺や井の頭公園をテーマにした楽曲を」というお話があり、「あの曲しかない」と思いました。羽衣をイメージさせるようなアレンジだとか、天地や時空が曖昧になるような、酩酊する気分を盛り込んでいます。

――やくしまるさんは、井の頭公園の100周年記念としていま流されている、定時の園内放送の声も担当しています。さきほどの映像を見ながらの演奏に似て、「弁天様はスピリチュア」を背景にしたこの放送も、音楽を街に溶け込ませるような試みです。

やくしまる：バウスでの最初のライブや、セッションのときにもお世話になった樋口さんから、「100周年として、井の頭公園や吉祥寺全体を盛り上げるようなことがしたい」という依頼を受けて。これまでも、やくしまるの声を街の放送や時報にするプロジェクトをいろいろ行ってきましたが、時報やカーナビの声のような、あるいは、冷蔵庫や蛍光灯の音のような、人の意識からちょっと外れたところにある声や音のあり方に関心があるんです。みんなが耳を澄ませていないあいだに滑り込んでいるような音に共感するので、園内放送をやるのは正しいなと。

映画『PARKS パークス』より

――この放送は『PARKS パークス』の冒頭でも使われていますね。

やくしまる：「弁天様はスピリチュア」もそうですが、この放送も、もとは『PARKS パークス』自体とは別で作られたもの。バウスがきっかけになった曲や放送とこの映画が、バウスが無くなったあとに巡り逢うのは、ちょっとしたタイムマシーンみたいで面白いです。

映画『PARKS パークス』より

――『PARKS パークス』は、純とハルという二人の女の子が、過去のオープンリールテープに残された未完成の音楽を、現代に蘇らせようとする物語です。映画の感想は？

やくしまる：さっきの井の頭公園の、魂の場所がわからなくなるような雰囲気が、すごくよく現されてるなと思いました。もちろん、純とハルの出会いに始まり、二人がライブを成功させるのかどうかというのが、物語の主軸になってはいるんですが、ハルはずっと正体不明のまま。とてもポップな映画ですが、この世界は、いつか何かが起きてしまうのではないかという怖さもありました。その怖さが、とてもいいなと思いましたね。

――たしかに、純の前にふらっと現れるハルは、幻のようにも思える存在です。

やくしまる：表面上は、自分が何をしたいのかわからない、自己が固まっていない純の悩みが描かれていますが、全編を通して見ると、ハルの存在こそ、どこにも定着していないまま漂い続けている。もうひとつ、音楽の情報量の多さも面白かったです。通常、映画音楽にとっての幸福は、どんな音楽が鳴っていたのか思い出せないくらい、物語に没頭してもらうことだという面があると思います。しかしこの映画ではその真逆で、ほぼ全編にわたって「音楽」が鳴っていて、物語と音楽がない交ぜになることなく、二つの軸が並走しているようなところがある。そのことが見ている自分の意識をも乖離させて、例の独特の浮遊感につながっていました。

――エンディングで流れる「弁天様はスピリチュア」はいかがでしたか？

やくしまる：樋口さんは、「弁天様はスピリチュア」と『PARKS パークス』を兄弟のようなものだと言っていたのですが、本当にそうだと思います。時空間を共有せず、それぞれ兄弟だとも気が

つかずに別々に成長してきた映画と曲が、エンディングではじめて出会う。それは、さっき話した井の頭公園の魂のあり方や、ハルと純や、この映画と音楽の関係といった交わらなさとも重なりつつ、最後のエンディングテーマがかかるときの公園の映像が、とても綺麗で。そのときやっと同じ場所から生まれていたことを直感する。ある種のどんでん返しのようだなって。

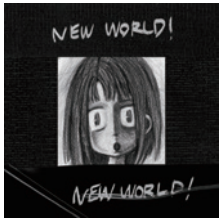
――最後は、公園を俯瞰する空からの映像が使われていました。

やくしまる：それまでは、若干の怪しさや不穏さを孕みながらも、公園や吉祥寺の街を舞台にヒロインたちが走り回る、わりと地べた感のある物語として進んでいたのに、エンディングがかかった瞬間に、一気に桃源郷のような雰囲気になるんです。地面からの目線だと、それぞれに思い悩む個々の魂が見えるけど、カメラがぐっと引くことで、光を反射する大きな池や自然、魂を運ぶたくさんのスワンといったものがない交ぜになった楽園の姿があらわになる。

――そこで、音楽と物語が一体になると。

やくしまる：ずっと交わらなかった二つの存在が、「私たち兄弟だったんだよね」と一緒になるようなカタルシスがありました。あの場所で、「弁天様はスピリチュア」はとてもよく映えていて、すごく素敵な使い方をしていただいたことを嬉しく思います。

やくしまるえつこ　音楽家、プロデューサー、作詞・作曲・編曲家として「相対性理論」など数々のプロジェクトを手がける他、ドローイングやインスタレーション、人工衛星や生体データ、バイオテクノロジーや人工知能を用いた作品、プロデュースワークや楽曲提供、朗読、文筆、と多岐に渡る活動を一貫してインディペンデントで行う。近作に「天声ジングル」、セーラームーン主題歌「ニュームーンに恋して」。新曲『わたしは人類』は世界初の音源と遺伝子組換え微生物で同時発表。レコード会社にもプロダクションにも所属しないアーティストとして史上初となる日本武道館公演『八角形』や、YCAMでの特別企画展『天声ジングル ― ∞面体』が開催された。5月6日にはZepp大阪ベイサイドでのライブ「証明II」を実施。



『PARKS パークス』エンディングテーマ
「弁天様はスピリチュア」収録
相対性理論『天声ジングル』
品番：XNMR-66600　レーベル：みらいレコーズ

スタイリスト髙山エリさんに聞く、

『PARKS パークス』ファッションの舞台裏。

「290」とプリントされたトキオ（染谷将太）のシャツはヴィンテージのベースボールシャツ。純（橋本愛）がはおるブルーのジャケットは「ZUCCa」。ハル（永野芽郁）のTシャツとスカートは「marble SUD」。

偶然にも吉祥寺は、私が東京で初めて住んだ街です。だから『PARKS パークス』のスタイリングのお話をいただいたとき、まず吉祥寺にあるお店に協力してもらえないかと考えました。当時住んでいた文化服装学院の寮からすぐのところに、「zootie」というヴィンテージショップがありました。イギリスを中心に40〜70年代のヴィンテージアイテムを扱っているお店で、よく通っていたんですが、10年ぶりに行ってみたら、変わらずにそこにあって。街や店がどんどん変わっていくなかで、セレクトもポリシーも昔のまま。うれしくなって、さっそく映画へのご協力をお願いしました。『PARKS パークス』は60年代と現在を行ったり来たりする話ですしね。石橋静河さんのブラウスやバッグ、染谷将太くんがライブで着るポロシャツはこちらで借りました。永野芽郁さんのワードローブには、吉祥寺にもお店があって、テキスタイルが印象的な「marble SUD」というブランドを多く使っています。橋本愛さんが着るブルーのジャケットは、吉祥寺PARCOにも入っている「ZUCCa」のものです。

監督の瀬田なつきさんからは、色を使ってほしいというリクエストがあって、私も普段から色を一番気にかけているので、自然にそうなっていきました。あとは、普段から着ている服に見えるようにと考えていたら、古着が多くなりました。もともと古着が好きなんです。橋本さんが演じる純は、よくいるようで実はあまりいないタイプ

①と②　佐知子（石橋静河）の着こなしは
小津安二郎監督の作品の原節子からヒントを得ている。
革のショルダーバッグと
ブルーの刺しゅう入りブラウスは「zootie」。

③　上半分に釜、下半分に寅がプリントされた
ユニークな“釜寅”Tシャツを着て
ラップの練習をするトキオ。

の女子大生で、異性をあまり意識していないので、なるべくそぎ落としたほうがいいと思いました。でも、ただそぎ落とすと地味になっちゃうので、そのバランスは考えましたね。永野さんが演じるハルは家出してきているので、着回しできる感じで、靴もVANSのスニーカー一足だけ。もう一足用意していたんですけど、結局使いませんでした。染谷さんのトキオは、迷いや不安があるように見えたし、自分のスタイルがあるようでない、調子がいい男の子だから、遊んじゃえと思って、いろいろ着せてしまいました。そんなわけで、実はいいものを着ていて、すごくおしゃれ。ただ、染谷くんだから着こなせたという気もします。60年代の登場人物はちょっと悩みました。60年代というと私がすぐに連想するのはツイッギーみたいなモードスタイルなんですけど、60年代の吉祥寺にいた普通の若者ですからね。いろいろ考えたあげく、石橋静河さんが演じる佐知子は『東京物語』の原節子さんのイメージがひらめいて、ヒントをもらいました。映画は残りますから、原節子さんのスタイルのように、いつまでも誰かの中に残り続けるような衣装を目指したいです。

髙山エリ　たかやま・えり｜文化服装学院卒業後、2007年よりフリーのスタイリストとして活動。2015年にはNHK連続テレビ小説「まれ」の衣装スタイリングを担当し、雑誌やMV、広告、映画など活動は多岐に渡る。独自の目線でファッションと人を捉えた『ギリギリマガジン』を自費出版で不定期に発行する。

純のブルーのワンピース、スカーフ、
トキオの赤いポロシャツは
すべてヴィンテージ。
トキオのポロシャツは「zootie」。

純のチェックの
ロングジャケットも
ヴィンテージ。

Shop Guide
in KICHIJOJI

zootie
OPEN　12:00〜20:00
東京都武蔵野市吉祥寺本町2-26-12
TEL 0422-22-3290

marble SUD
OPEN　12:00〜20:00
東京都武蔵野市吉祥寺本町2-18-15　カントリーハイツ107
TEL 0422-27-5933

CABANE de ZUCCa
OPEN　10:00〜21:00
東京都武蔵野市吉祥寺本町1-5-1　吉祥寺PARCO 2F
TEL 0422-27-5605

吉祥寺だけが住みたい街でした

マキヒロチ

5

マキヒロチ｜冒頭に吉祥寺バウスシアターの閉館の話題が登場するコミック『吉祥寺だけが住みたい街ですか?』の作者。吉祥寺で不動産業を営むにもかかわらず、吉祥寺に住まいを求めてやってくる客たちを吉祥寺の外へと案内する女性を主人公とするこの作品は、そこにある吉祥寺への裏返しの愛とともに多くの読者の心をとらえ、現在も「ヤングマガジン サード」誌に連載中。最新単行本第4巻発売中。

『吉祥寺だけが住みたい街ですか?』第4巻発売中
発行：講談社
定価：590円（税別）

logo design：siun｜小酒井祥悟が2013年4月に設立。「TO magazine」や「&premium」のwebsiteなどをデザイン。

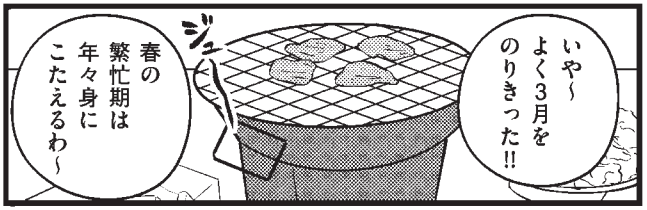
私は『吉祥寺だけが住みたい街ですか?』という吉祥寺に住む不動産屋の漫画を描いていますが、『いつかティファニーで朝食を』というグルメ漫画も描いています。当然、食べることが大好きで、吉祥寺にも大好きなレストランが沢山あります。トークバックやトニーズピザや春木屋などなど・・・その中でも特に思い入れがあるのは、家族とよく行ったお店で、家族と何かお祝い事があると必ず行っていたのが李朝園です。吉祥寺に詳しい方でしたらベタなお店ですが、やっぱり美味しいし、いつも沢山のお客さんで賑わっていて、家族みんながいつもよりテンション上がっている様子が子供ながらに嬉しかったりしてて、思い返してみると楽しかったことしか思い出せません。でも、当時いつも一緒に食べに行っていた祖父母は年をとってしまったので一緒に行くことができなくなってしまいました。今ではもう作ることのできない思い出の詰まった大切なお店です。

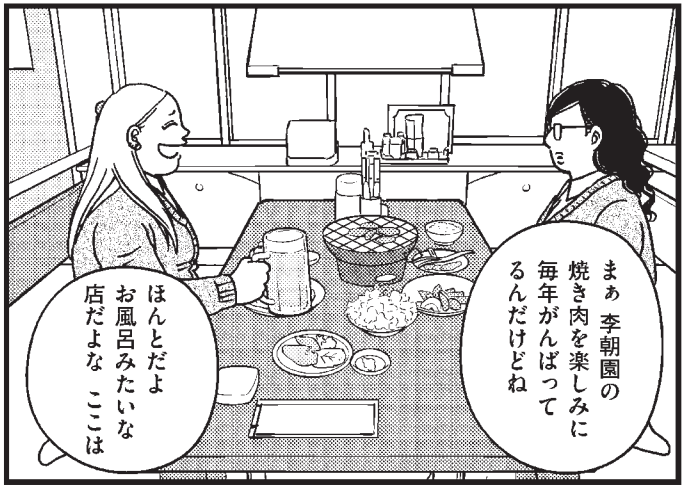
もう一つ大切なお店は、東急裏にあるシャポールージュ。こちらは、離婚して離れて暮らしてた父方のおばあちゃんと会う時によく訪れたお店です。おばあちゃんは私のよき相談相手で、食後の今でも変わらない酸っぱいオレンジソースがかかったババロアを食べながら、よく悩み事を相談していました。おばあちゃんはもう亡くなってしまったけど、おばあちゃんを思い出す時は何故かシャポールージュの席に座っているおばあちゃんの姿なんです。

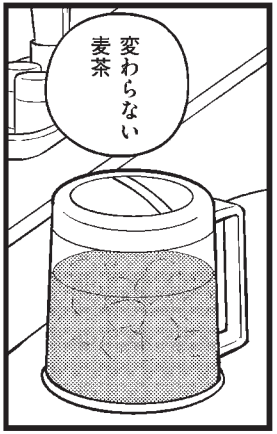
そして、スイーツと言えばレモンドロップ!・・・と言いたいところですが、昔から和菓子派の私は、麻布茶房のスイートポテト（あんこ付き）をよく食べに行きました。麻布茶房はチェーン店だし吉祥寺じゃなくても・・・と思う方もいると思いますが、意外と店によってメニューが違ったりしてスイートポテト食べれなかったりするし、小さい頃はここしか知らなかったので麻布茶房と言えば吉祥寺!と思ってしまっているのです。店員さんの上品な制服が好きだし、上りはエスカレーターがあるのに帰りは階段しかなくてやや迷う建物の構造とか、漫画やCDを買ってはここで開封して夢中で読んでいた思い出があったり、とにかく色んな意味で吉祥寺でのスイーツといったら麻布茶房のスイートポテトなのです。

まだまだ大好きな吉祥寺グルメは語りきれないですが、それはまた漫画の中で描いていこうかなと思います。もし私のコラムや漫画を読んで「久しぶりに食べたいなぁ」なんてお店に足を運んでいただけたら嬉しいです。

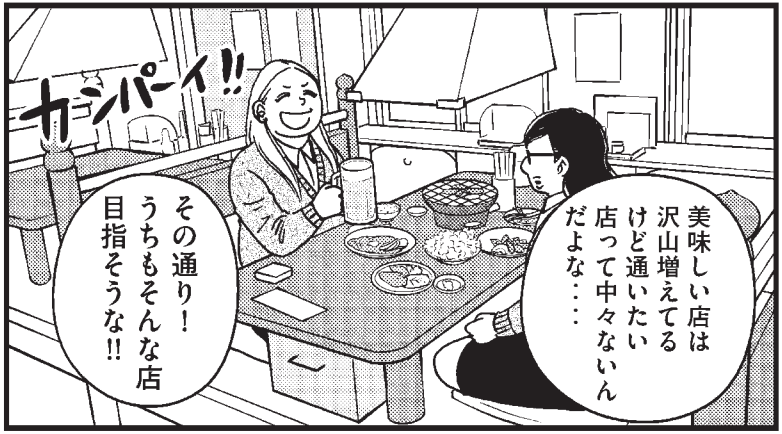
焼肉
李朝園
冷麺
女性
おつかれさーん


いや～ よく3月をのりきった!!
ジュー
春の繁忙期は年々身にこたえるわ～


まぁ 李朝園の焼き肉を楽しみに毎年がんばってるんだけどね
ほんとだよ お風呂みたいな店だよな ここは


変わらない麦茶

変わらない外人の店員


カンパーイ!!
美味しい店は沢山増えてるけど通いたい店って中々ないんだよな・・・
その通り! うちもそんな店目指そうな!!

IN CINEMA,
IN KICHIJOJI
vol.5

吉祥寺と映画について語る本コーナーの最終回は、映画プロデューサーの松田広子さん。『PARKS パークス』のプロデューサーでもある松田さんは、ご自身も吉祥寺に長く住んでいて、街を愛して止まない人間のひとり。そんな視点から移り行く街と、それを映し出してきた幾つもの映画について書いてもらいました。まるでそれらの映画が、何か大きな映画のひとつのよう。そして『PARKS パークス』もそれにふんわり重なっていくような感じがします。

吉祥寺と映画と公園と

松田広子 ｜ プロデューサー

今日もどこかで撮影しているのでは？　というくらい吉祥寺はロケが多い街。瀬田監督と公園のロケハンをしているときにも、ドラマ「心がポキッとね」（CX）の撮影を終えたばかりの照明部さんに会いました。

『PARKS パークス』（以下『PARKS』）のあとに撮影された永野芽郁さんの主演作『ひるなかの流星』（2017／新城毅彦）も主に吉祥寺ロケ。永野さん演じる“すずめ”は、先生と同級生との間で揺れる自分の気持ちに真摯に向き合うことになる少女です。偶然にも『PARKS』のハルと同じように、はじめて東京にやってきた設定で、通っている高校の設定で使われているのは成蹊学園。『PARKS』では橋本愛さん演じる純の大学として撮影しています。ハルが“父親の青春”を目撃する公園は、『ひるなかの流星』ではすずめ自身の恋の舞台になっていました。なにやら感慨深いです。

井の頭公園100周年記念映画である以上、桜は必ず撮ってほしい、というのが企画者本田さん（バウスシアターの元支配人）のリクエストだったので、この原稿を書いているちょうど1年前の3月31日、桜のシーンから『PARKS』の撮影はスタートしました。その日、同じように桜を狙った「グーグーだって猫である2」（2016／WOWOW）の犬童組に遭遇。そういえば犬童一心監督の映画『グーグーだって猫である』（2008）も桜咲く公園の情景ではじまっていましたっけ。当時、駅ビルはまだLON LON（現在はatré）で、公園口の「いせや」は改装前でした。昨年天国へと旅立った、自然文化園の人気者、象の“はな子”もその姿を残しています。『PARKS』にも100周年を祝してぜひ出演してほしかったのですが、撮影の頃には体調を崩し、檻から出なくなっていて、願いはかないませんでした。

駅ビルがatréに改装中の頃に撮影されたのが『吉祥寺の朝比奈くん』（2011／加藤章一）。やはり“はな子”は登場し、「さとう」のメンチカツなど、吉祥寺ロケの定番がおさえられています。登場人物たちが「バウス（シアター）で今ちょうど爆音映画祭をやっていて…」などと話していて、劇場の入り口があった2階の踊り場でのシーンもあり、今はもうないその場所を思って胸が痛みます。バウスでの爆音映画祭には橋本さんや染谷さんも来場していたそうです。

井の頭公園の中でもメジャーな撮影場所と言えば、池のボート、七井橋ですが、観光コースではないところにも人気ポイントがあります。

『ひるなかの流星』
©2017フジテレビジョン 東宝 集英社　©やまもり三香／集英社

『ライブテープ』

井の頭公園駅から住宅街へと抜けていく途中にある井の頭線の高架下。アーチ型にくりぬかれた橋桁のデザインがよかったからなのか、ドラマ「高校教師」(1993／TBS)の通学路として当時はちょっとした聖地だったはずです。補強のためアーチの中がコンクリで固められてしまってからも、『東京タワー〜オカンとボクと、時々、オトン〜』(2007／松岡錠司)『グーグーだって猫である』、最近ではドラマ「火花」(2016／Netflix)などにも登場しています。

『PARKS』でももちろんこの高架は上下とも大事な場所。純が自転車で走っていくとその画面がそのままパソコンの待ち受け画面になるという監督の遊び心を満たすシーンに使われていますし、音を集めるトキオがマイクを向け、ハルを探して走る純はこの場所で振り返ります。純とハルが上と下ですれちがうのもこの場所。高低差を使った演出で瀬田監督らしいシーンになっていると思います。

高架下をくぐると、『PARKS』で言えば寺田さんの家のあたりなのですが、ボート池周りの賑やかさに比べると落ち着いて生活感もあるエリアです。『風kaza-hana花』(2000／相米慎二)では大型クレーンをもちこんで川沿いの桜を撮影していました。『吉祥寺の朝比奈くん』では朝比奈くんが年上の女性と歩いていた道、『ひるなかの流星』では通学路になっていました。

公園ロケが印象的な作品をもうひとつ。2009年元旦に武蔵野八幡から井の頭公園までワンカットで前野健太を追った『ライブテープ』(2009／松江哲明)です。バウスシアターの入り口付近で「100年後」を歌い、サンロードを進み、ハモニカ横丁では二胡奏者(NRQとして『PARKS』サントラに参加の吉田悠樹さん!)とセッション。古い駅ビルを南へとくぐり抜け、丸井の横を通り(純と理沙が歩く道)、公園の野外ステージへ到着します。ステージ前にはたまたま居合わせたおばあさんと孫がいて、走り出したその子供の背中を追ってカメラがパン、演奏中の「東京の空」をバックに、ぐるりと夕暮れの公園を写し出します。なんでもない風景です。それがいい。

街が映ると今はもうない建造物に目がいき(それは貴重な記録でもあるのですが)時の移り変わりを強く感じることになります。ところが公園のシーンとなると、関心はそこにいる人たちに向かうのです。映画の中でも現実でも、いつも同じように親子や恋人たちが歩いています。友人と語らったり、音楽を楽しむ人たちがいて、とても身近に感じられるのはなぜでしょう。

♪　みんなどこかいっちゃったけど　変わらないものもある。
　　100年前からあるこのPARK　♪

ceroの髙城さんが書いてくれたこのライムが胸に染みます。

松田広子　まつだ・ひろこ｜東京都出身。雑誌『STUDIO VOICE』『SWITCH』の編集者を務めた後、映画プロデューサーに。プロデュース作品は『おかえり』(96／篠崎誠監督)、『カナリア』(04／塩田明彦監督)、『恋するマドリ』(07／大九明子監督)、『アブラクサスの祭』(10／加藤直輝監督)など。2015年のプロデュース作品『岸辺の旅』(黒沢清監督)は、カンヌ国際映画祭ある視点部門で監督賞を受賞した。

『PARKS パークス』サウンドラックアルバム絶賛発売中！そして配信も開始！

橋本愛が歌い染谷将太がラップする劇中歌「PARK MUSIC」や、吉祥寺バウスシアターの閉館時の劇場でのセッションが元になって生まれたエンディングテーマ「弁天様はスピリチュア」（相対性理論）など、20バンド以上が参加した豪華アルバム。音で予習をしてから映画館へ。映画が2倍楽しめるはず。
そしてまた、各種配信サイトにて、配信も始まりました。映画を観て気になったあの曲この曲、チェックしてみてください。

V.A.（PARK MUSIC ALLSTARS他）　映画『PARKS パークス』オリジナルサウンドトラック
TONO-004　発売元：TONOFON　販売元：P-VINE

5/2（火）
18:45〜19:45

もうひとつの『PARKS パークス』が上演されます！

井の頭恩賜公園100歳記念ウィークに西園競技場にて映画『PARKS パークス』関連イベント演劇版「パークス・イン・ザ・パーク」を開催します。ロロの三浦直之の脚本と演出、そして池亜佐美のアニメーションによって『PARKS パークス』のその後の物語が展開します。入場無料、そして一夜限りの公演ですのでお見逃しなく。

井の頭公園
園内放送に注目！

相対性理論のエンディングテーマが井の頭公園で流れています

映画のエンディングに流れる相対性理論の「弁天様はスピリチュア」が、井の頭公園で毎日流れる園内放送のBGMとして、昨年の5月から使われています。そして園内放送のアナウンスをするのはやくしまるえつこさん。10時、12時、16時。要チェックです。実は映画の中でもその放送は流れているんです。

吉祥寺と井の頭公園から生まれた映画

PARKS パークス

橋本愛　永野芽郁　染谷将太　石橋静河　森岡龍　／　佐野史郎
瀬田なつき監督作品　音楽監修 トクマルシューゴ
劇中歌：PARK MUSIC ALLSTARS「PARK MUSIC」
エンディングテーマ：相対性理論「弁天様はスピリチュア」

4/22（土）テアトル新宿、4/29（土）吉祥寺オデヲン ほか全国順次公開

製作：本田プロモーション BAUS　製作プロダクション：オフィス・シロウズ　配給：boid　宣伝：VALERIA、マーメイドフィルム

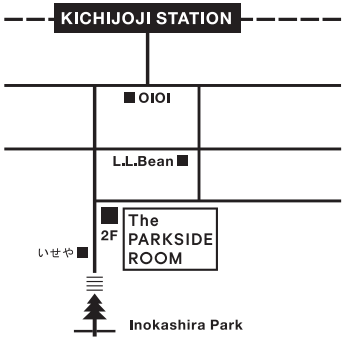
parks100.jp　fb.com/parks100jp　@parks100jp

フリーペーパー『PARKS』5号　2017年4月20日発行
編集　岩井秀世、樋口泰人（boid）
編集協力　松浦泉、中村悠太、柴崎祐二（トノフォン）
松田広子、小倉聖子（VALERIA）、田中有紀（boid）
写真協力　薮下雷太、みらい制作
スポッテッドプロダクションズ
タイアップ　栗田豊（AGITO）
デザイン　中野香
発行　boid
東京都新宿区高田馬場1-7-9　サンケイマンション203
☎ 03-3203-8282　www.boid-s.com

Shop Information

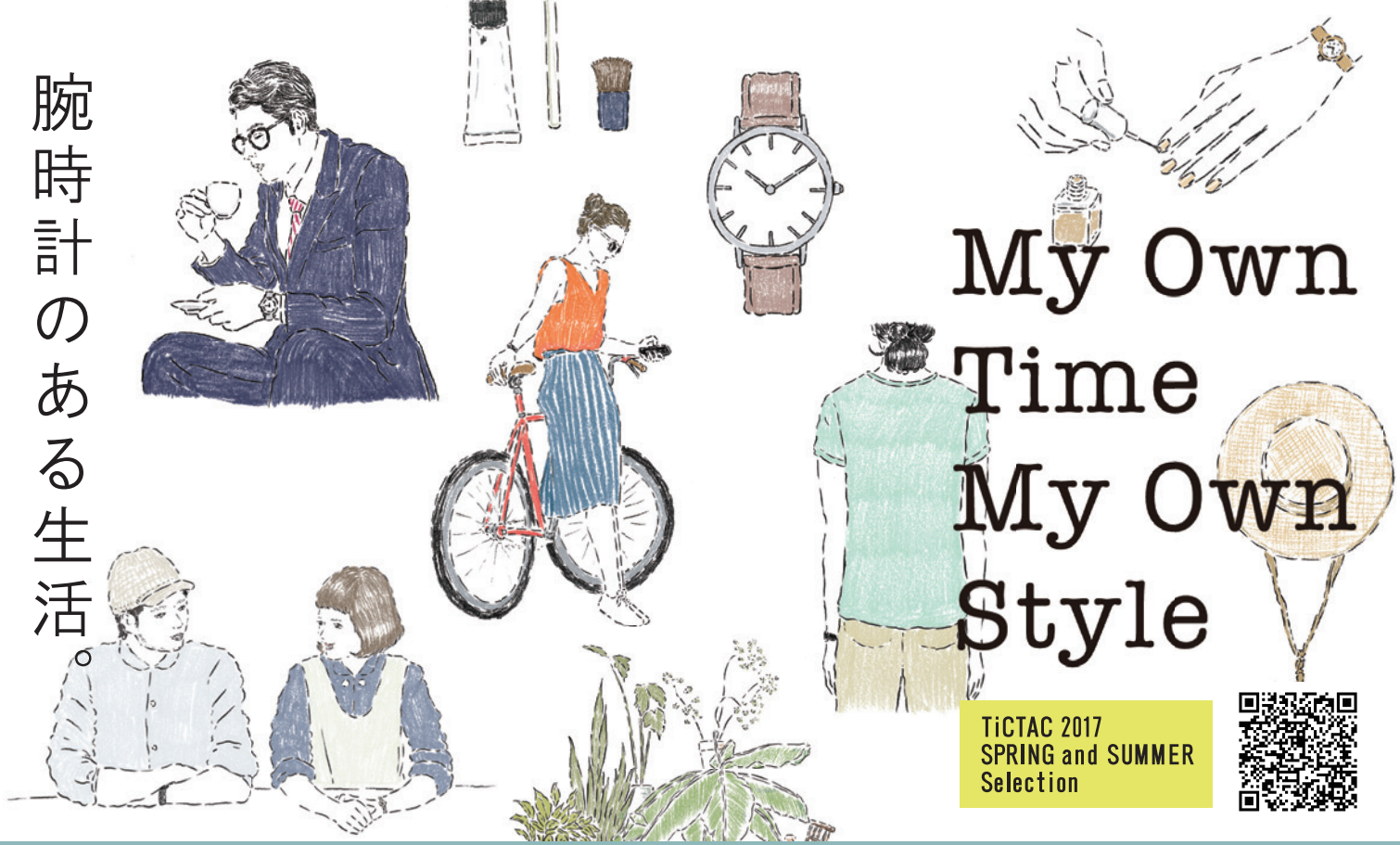
吉祥寺駅徒歩 5 分、 井の頭公園近くの
メガネ・サングラスを中心としたセレクトショップ。

「単焦点レンズ」はもちろん、「伊達メガネ用レンズ」「遠近両用レンズ」「ブルーカットレンズ」など多様なレンズを取り揃えております。 映画『PARKS』にメガネの衣装協力をしています。



180・0003 東京都武蔵野市吉祥寺南町 1-17-1 2F
T/F 0422・41・8978 E-MAIL info@tpr.jp
URL http://www.tpr.jp OPEN 12:00 - 21:00 水曜日定休

腕時計のある生活。



My Own Time My Own Style

TiCTAC 2017
SPRING and SUMMER
Selection

TiC TAC チックタック吉祥寺店
吉祥寺パルコ 1F　TEL:0422-23-5070

TORQUE　WATCH POLITICS　SPINDLE　junks　monitor

SHOP LIST ▶

INSTAGRAM
@tictac_press ▶